第五章　岩川の弥五郎どんの祭礼具

第一節　弥五郎人形
第二節　台車
第三節　弥五郎面
第四節　諸道具

弥五郎面（古面（左）と現在の面（右））

第五章　岩川の弥五郎どんの祭礼具

第一節　弥五郎人形

弥五郎どんは大きく分けて、胴体部分と台車部分とに分けられる。上部の人形と別々に作った方が効率がよいからである。山車（だし）とかだんじり・曳山などと似てはいるが、山車などは、神を山車に降りてくるようにしたものなので、弥五郎どん台車は山車とは言えない。しかし、似ているので、作り方は山車と同じ方法を用いている。

山車の作り方は、毎年使うことから、一つ一つをばらばらにして、格納している。地域によっては、台車の基礎部分は腐れないように水に漬けている所もある。組み立ては、祭りに合わせて、一週間前、とか数日前と地域の山車の規模に合わせて日数が決まっている。

例えば、市来祇園の山車は七日前の朝六～八時までの間に台車から組み上げ、だんだん上の方を作り出し、当日二日前からは大勢の加勢をもらって、作り上げていく。そして前夜祭のときにはだいたいでき上っているが、本祭当日朝に全体を仕上げるようにしている。

弥五郎どんの場合は、十一月二日の日中に準備を始め、夜中の二時から一気に作り上げることが特徴である。

古くは毎年作り、裏山へ捨てていたが、台車がシャーシに変わってから、四年に一度胴体を作り変えることになってきた。

竹細工職人製作の本体（平成 24 年撮影）

胴の中に鉄骨が入り、簡単に作り変えができなくなったからであろう。

そこで、本職の竹細工人に頼んで作ってもらっていた。唐竹や孟宗竹を切って持参して、神社境内の一角で作り上げる。ところが、本職の竹細工師がいなくなり、胴体の竹を切りに竹山へ出かけ、竹を集め、その竹から数センチ幅のヘギ（籠を編む幅の狭い・長い・平たい）を作ることから始めなければいけなくなった。そこで、令和二年、南さつま市加世田の竹細工師から竹ヘギ作りの機械を買ってきて、自在にヘギの幅や厚みを作ることができる。機械で作ったヘギで胴体を作ることができた。これは弥五郎本体作り部の方々の熱意である。

一　胴体と腕の作成

まず本体の胴を唐竹で編んでいく。大きくて、軽くなくては、台車に乗せて引いていくことができない。木では円筒形を作りにくいし、竹ヘギほどの薄さにすれば、折れてしまう。南九州では竹文化が発達しているので、形を自在に作れるし、費用も抑えられる。

ヘギができると、今では円筒の鉄骨の回りに円筒形に編んでいく。六つ目という六角形に編んでいく。これは普通の籠などで編む、もっとも

ヘギ取り

多い編み方で、この六つ目は魔物を封じる力があるとされる。六芒星（正三角形を2つ反対向きに重ねたもの）から来たともいわれるが、六角の目（籠目）がたくさんあって、にらんでいるから、魔物は縮み上るのであろう。また、八代あたりの鯉のぼりの下に丸い六つ目籠があり（直径六十センチほど）、上から長く伸ばしたヘギに白や赤のお手玉のような丸いものを付けているが、これも魔を払っていると思われる。

六つ目編みで編む

頭部

胴体部

腕部

胴体上部

脚部

六つ目編みで胴体を作ると、同じ編み方で開いた足と腕を左右二つ作る。足は二又に開き、胴体の半分ほどもないくらいで、円筒形の足を付ける。

腕の脇部分は太く、肘から手は細く、最後は肘から先は編まずに、ヘギのままにしておく。肘から先は腕を曲げて前に組み鉾を持つようにする。だが、初年度はヘギも柔らかいが、四年目にもなると、竹の弾力性がなくなり、注意して曲げないと折れることもある。四年ごとに作り変えるのは竹の弾力性がなくなるからでもある。昔は毎年作り変えていた。

骨格部は、元々は木製、その後、鉄骨製、そして平成二十四年からは現在はスチール製となっており、軽量で丈夫になっている。

なお、この節では、平成二十四年に福丸實氏（竹細工職人）が製作した時の写真を用いた。

スチール製の骨格部

スチール製の骨格部（側面）

台車と骨格部

完成した本体

二　衣を縫う・着せ方・面を付ける

梅染めの衣は二十五反必要。縫うのは別項目で扱うので、ここでは略す。着せるのは上着からで、上向きの胴体の右腕から通していく。衣はヘギの角にすぐ引っ掛かるので、ゆっくりと慎重に指導者の声に従いながら、着せていく。

その間に面を出し、神官がお祓いをしてから、首から上、面や飾りを別の組が仕上げていく。サラシをぐるぐる巻きにしながら、面が正面を向くかなど検討しながら、こちらも長い時間かかって仕上げていく。

右腕に衣を通すのは、むずかしい。肘から二つに曲げて、右腕を通してから伸ばし、再び曲げて前で組む。

刀や煙草入れは後で付けるので、上衣を付け終わると、拝殿から外へ出す。ひと苦労して出し、台車へ乗せ、上向きのまま、一応台車へ固定する。それから弥五郎どん起こしが始まる。二分とはかからず、すぐ起きる。後ろから支え棒（T字型）で押しながら、直立させて終る。これから後は外の作業で、袴は腰のあたりから付ける。しっかり付けないと、刀二本や煙草入れを左右に付けるので、垂れさがらないように仕上げて行く。最後に草履や高下駄などを前方に飾り、終わりとなる。朝七時頃である。

腕の位置の確認

右腕から着物を通す

上着を着せて腕の位置の確認

頭上の鳥と尾羽の位置確認

腕の位置の確認

胴体と腕の接続部

なお、この節では、令和二年十月二十五日の衣装合わせの際の写真を用いた。衣替えの年は、本体と衣装がきちんと合うように調整する作業を行っている。

第二節　台車

一　古い台車では

多分、大きな角材を使った四角い台に、木を輪切りした車（輪）だった。前に述べたように、ばらばらにすることができ、神社に隣接した倉庫があり、その中に入れたか、材料が大きいので、別に専用の倉があり、その中に納めていたであろう。もちろんバラバラにすると、体積は少なかったので、まとまって納められた。現在、古い台車に乗った弥五郎どんは大隅文化会館ロビーに展示しているので、見ることができる。

川に挟まれた地形に八幡神社はあったので、水は豊富であったなら、溝のような水の中に漬けていたかもしれない。

釘やカスガイなどの金属を使うとサビ付くので、クサビや木組や継ぎ手などの技術を使って、頑丈な台車とした。釘などはサビが出てゆるくなり、長く使うことができない。分解が簡単で、組み立ても楽な木組みにしている。

昭和 22 年製の台車

二　大正三年、現在地へ移ってから

現在残っている台車を見るとまだ鉄骨を使っていないので、がっしりとした台車の上に弥五郎どんの竹籠（二本脚）を一本の家の棟木のような台木に乗せている。それが弥五郎どんの股の前後に長く突き出ている。木の輪切りの車輪の外側はクサビで止めている。社殿から出て、すぐの下り坂用のブレーキも最後の枠の中に細い板を使っている。もちろん先頭の引き手とは逆に、後ろにブレーキ役の引き手がいるので、用心のためのブレーキであろう。また、昭和三十二年頃の写真によると、方向転換は、長い棒を使って移動させている。

なお、昭和二十年後半から弥五郎行事に携わっていた野口久夫氏の証言によると、この頃（昭和二十六年頃か）、鎌田製材所の大工の小林氏が、電線を通過する時に、ワイヤーを使って本体を後ろに少し倒すための装置（下図）を作ったという。少なくとも昭和三十年まではこの台車を使用しているが、その後、元の台車に戻っていることから、巡行をスムーズに進めるための試行錯誤を繰り返していたことがうかがえる。

昭和 22 年製の台車に
試作の本体を設置
（大隅文化会館にて展示）

一時期使用された台車
（昭和 26 ～ 30 年頃）

方向転換している様子
（昭和 32 年頃）

三　機械の台車になる

自動車の台車に変えたのは、

① 木輪（木の車輪）では最初の引き始めに、力を入れないと動かない。

② カーブするとき、一方を動かないようにして、木の棒で片方を大きく回さないといけない。簡単にカーブしない。

③ 竹籠は自動車にしっかりと立てられない。そこで、鉄の網目にした円筒形を自動車にしっかりと付けるようにした。

台車（運転席）

現在の台車

台車（後方部）

台車（側面）

④ しっかりと弥五郎どんを付けられたので、肩に乗る人が左右に揺らすと、肩を怒らして（悠然として）歩いている様子を印象付けている。

⑤ 弥五郎どんを後ろに倒す、イナバウアーをすることができる。

四　三つの弥五郎どん（様）を比べる

古い時代、いつまでたどれるかはわからないが、3つの弥五郎どん（様）の台車は分解して小屋みたいなところに納めていたであろう。

現在だけで、それぞれどのようにしているかを比べると、山之口は弥五郎の館に完成したままで保管している。岩川では神社本殿の裏にある格納庫に他の物品と一緒に収納している。飫肥も神社の左側の倉庫に他の物ものと一緒に大きな本体（弥五郎様と小弥五郎様）を納めているが、数年前までは、神社前の階段を下りた神社に向いて左側にバラックがあり、その中に台車をばらばらに分解して、横に置いていた。飫肥は昔からの組立て式である。面・腕（大弥五郎様は木、小弥五郎はプラスチック）・烏帽子などは別の部屋の中である。面は一回盗まれたことがある。

袴を外した本体と台車（解体時）

第三節　弥五郎面

信仰面

南九州の仮面は、「芸能面」と「信仰面」に分けられる。信仰面には奉納面・掛け面・巡行する面の三つの類型がある。

一　奉納面（王面）

南九州には奉納された信仰面が多い。奉納面の裏に「王面」と墨書されている事例が十五もあるので、このような面を「王面」と呼んでいた事が分かる（註1）。

「王面」は、阿吽一対に作られ、彩色はほとんどなく、目鼻口等は孔（あ）けてない。分厚いので被って舞う為の面ではない。面裏には、「奉施入王面」と書いてある例が多い。奉納理由としては、神社仏閣への祈願理由としてよく使われる「息災延命」などの墨書も見られる。

素朴な表情の面もあるが、どちらかと言えば不動明王や蔵王権現像のような憤怒形相の面が多い。「奉納王面」は、魔除け的な意味を持つ面のようでもある。王面は別当寺住職や修験者等が作り、神社に奉納した事例が多い。神仏習合の中から生まれ、仏教的な側面を持つ面のようである。製作年代は室町期から江戸時代後期までだが、近世初期の作が多い。これは修験道の最盛期と重なる。

鹿児島県内には平成四年（一九九二）時点で二六四の王面が確認されている（註2）。県内で王面の多い神社は、霧島市止上神社（三十四）・薩摩川内市甑島里八幡神社（十四）・大崎町都万神社（十二）、曽於市末吉町檍神社（十二）・曽於市岩川八幡神社（十一）・伊佐市大口曽木荒瀬神社（九）などである。

廃仏毀釈の嵐で県内の寺院は消滅し、仏像なども尽く破壊されたが、王面は神社に収納されていたので残った。しかし今日までその価値はあまり認識されてなく、かなりの数の面がすでに散逸したようだ。昭和五十一年六月岩川八幡神社には十一の王面があった（註3）が、今は紛失してしまっている。

二　掛け面（掛王面）

社殿柱に阿吽一対の面が掛けられている（薩摩川内市新田神社・鹿児島市郡山花尾神社・指宿市揖宿神社・曽於市住吉神社など）。この掛け面は、奉納王面と同じ面のようだから「掛王面」とも言ってよい。この面は、寺院門前に立つ阿吽一対の仁王像のように、祭神守護の役目を担っている魔除け面である。奉納された王面よりやや大型の面が多い。左の岩川八幡神社仮面写真の後方に三面が立てかけられて写っているが、中央と左側の面は奉納王面で、右側の面が「掛け面」のようである。

曽於市末吉町住吉神社の「ホゼ祭り」に、社殿の柱に阿吽一対の面が掛けられている。この面裏に「神王面　大飛出（もう一つの面には大癩見とある）江戸出目栄満門人薩州出目満如作、右之面住吉神社江相納居候處、嘉永六年癸巳十一月、太守

岩川八幡神社の奉納面（向山勝貞氏撮影）
現在行方不明になっている

斉彬公御巡見之節被遊御覧、彩色相□作二付取繕候様被仰付、此度致成就以前之通被相納候事」と彫られている。斉彬公の命により出目満徳が大飛出面を修復した事が分かる。この面は、通常は神殿に収められており、「ホゼ祭り（秋季例大祭）」の時だけは社殿の柱に掛けられる。面裏に「神王面」とあるので、祭礼で巡行した面なのかもしれない。以前は社殿入口の幟旗に括られていたとも云う。

揖宿神社

住吉神社

三　巡行する面

巡行する面は、「猿田彦」とか「火・水・風王」と呼ばれる天狗鼻系の面と、「神王面」と総称して呼ばれる大鼻面系の二つがある。

・天狗鼻面系（猿田彦・火水風王面）　「猿田彦」と言われている面と、博多筥崎宮の「放生会浜下り」、人吉市青井阿蘇神社の「おくんち祭」、八代市八代神社の「妙見祭」などで「火の王・水の王・風の王」などと呼ばれる面がある。その面は、どれも天狗鼻面である。

筥崎宮「放生会浜下り」

鹿児島市荒田八幡神社「正祀ニハ古来神輿ニテ濱下りノ御神事有シニ、火之王水之王両面ヲ鉾ニ掛テ、境ヲ巡リ」（註4）の面や、さつま町湯田八幡神社の「正祭九月廿五日、社前二王門外、千臺川に神輿濱殿下りの式あり、怒貌猛威をふるひ、前導し、雲龍・青蛇を青赤白にて書たる旗二流に、水火神の二面を掛たるを捧げ、社人は寶釼二振を奉じて、神輿の左右に扈従し、或は幣を持もあり、或は楽を奏するものあり、是日詣人甚多く、門外には市店を構へ男女群集す」（註5）の面もこの系統に入る。

天狗面系の「火・水・風王」面は、九州西側の福岡から熊本や薩摩半島にかけて分布している。宮崎から大隅半島にかけては見られない。鼻高面という言い方をする大隅半島南端の肝付町岸良平田神社・内之浦高屋神社などの面もあるが、火王とか水王とかの呼び方はしない。

青井阿蘇神社「おくんち祭」

・大鼻面系（神王面）　神の依り代面の事を総称して「神王面」と言う。神王面は、「鹿屋市田崎神社では「一ノ王子面」、曽於市投谷八幡宮では「王子面」、霧島市止上神社では「王面」、錦江町旗山神社でも「王面」などと呼ばれているが、総称して「神王面」と言う。「神王面」は同じ容貌の面は無く、それぞれ違う。額部に神性を示す突起物を付けている面もあり、顔面だけの仏像のようでもある。

南九州市飯倉神社の「お田植祭り」で先導役をする「猿田彦」と呼ばれている面がある。この面は、頭部に獅子冠を抱いており、仏像の「愛

染明王」と似ている。面裏に「奉施入王面」と墨書されているので、元は神王面であったのが、先導するから猿田彦と呼ばれるようになったのであろう。弥五郎どんも先導するので猿田彦神とも云う人がいる。

神王面という呼称は鎌倉時代からあったようで、新田神社文書に「神王面の事、彼面者往古之霊物、大菩薩之御躰也、寛元四年（一二四六）八月為明所当之済否、罷向神領之処、奪取一神王面、奉置百姓下兵太之許、打破二神王面畢」（註6）とある。これは、年貢の済否を明らかにするために神王面を掲げて領内巡行をしていたが、乱暴狼藉にあったと言う内容の記録である。この文書によれば、神王面は「大菩薩之御躰也」であるという。

霧島市止上神社では「當社に中古までは、王の御幸といへる祭式あり、毎年正月七日神輿を守り下り、同月廿二日に至り行廟にて種々の神供を献じ祭をなす。是往古隼人の霊魂祟りをなし人民に害をなせし故、當時御幸の式を設け彼が霊祟りを鎮めし大祭なりし。慶長の中比までは毎歳執行して絶えざりしが、其後廃せしとか」とある（註7）。また止上神社に残る文書に「神王面六ツ、一ノ王白色、二ノ王子赤色面、三ノ王子白色面、四ノ王子赤色面、五ノ王子黒色、六ノ王子黄色面。二ノ王子赤色面ハ額ニ大小ノ角有テ髪毛ハ不動ノカミノ如シ、六ツ共ニ鼻高面ナリ、神幸ノ時ノ神王面ニテ、有之唐櫃ニ奉納シテ御座候」（註8）とある。止上神社でも「一の王面」などと呼ばれていた面のことを総称して神王面と言っていた事が分かる。

止上神社神王面
（三の王・四の王・五の王）

神王面が巡行する祭りは今も南九州に多い。錦江町池田旗山神社の「柴祭」、鹿屋市田崎神社の「神王面渡御祭・鹿祭り」、霧島市止上神社の「王の御幸」、湧水町箱崎八幡神社の「ウオードン（大王殿）祭」、曽於市投谷八幡宮の「王子御神幸」、宮崎県えびの市香取神社の「打植え祭」、揖宿神社の「浜下り」などである（註9）。「弥五郎どん祭り」も、このような神王面巡行祭の中に入ると考えられる。

神の依り代として巡行する面が偶人化する時に固有名詞の呼び名がつけられる。先導神であるから「猿田彦」よばれたり、元の領主の意味から「大王」と呼ばれたり、御霊信仰から「弥五郎」と名づけられたりしたのであろう。

日置八幡神社の大王殿

元亨三年（一三二三）「新田神社文書、新田宮神人等名帳」に「猿田彦大神御車引二十五人」（註10）の記録がある。すでに鎌倉時代に、弥五郎どん巡行のように二十五人もの神人が車で引く「猿田彦大神」巡行が行われていたようである。

ところが、「神王面虫損事、神慮難測之間、依仰天裁、謹捧奏状畢、因茲、倩考舊貫、大王者猿田彦大神是也、神王面者悪魔降伏變化所作神云々、件虫損之条、開寶蔵令拝観之刻、承蒙古人叛逆之由畢、是則當宮既及廃亡之間、如此之折節、希代之不思議事、神慮所令然歟、雖然、為蒙古人降伏、神王悉趣彼闘戦之都

日置八幡神社「大王殿（デオードン）」

途給之由、或乗諸人之口、或有無想之告、随蒙古人征伐之条無疑殆、是偏鎮護国家之尊神之故、忝所顯厳重之奇特給也云々」（註11）との文書がある。寶蔵を開けて見たら、神王面が壊れていた。これは蒙古襲来に際して神王面がはせ参じて戦ったからである。この事は諸人の夢や口噂となって広まった。それで、新田神社の「猿田彦大神車引き」神事は途絶えてしまったのだろう。

日置市日置八幡神社の「お田植祭り」に「大王殿」と称する大型偶人か巡行する。『薩隅日地理纂考』によれば「奉祀天照大神、天津彦彦火瓊瓊杵尊、栲幡千々姫命ノ三座ニテ水引八幡新田宮ヲ勧請セシトイフ、九月十五日ヲ正祭トシ、竹偶人ヲ作リ、社殿ニ納ル所ノ大王面ヲ着セ梅染ノ衣服ニ大ナル木刀ヲ佩ク、四輪車ニ乗セ里童ヲシテ前路ヲ馳セシム」とある。（註12）日置八幡神社は、新田神社を勧請した神社である。新田神社文書には「大王者猿田彦是也」とあるから、新田神社では「猿田彦大神」と呼ばれていたのが、日置八幡神社では「大王殿」と変わっただけのようだ。新田神社では大王・猿田彦面を「神王面」とも呼んでいた事も分かった。

湧水町箱崎八幡神社の「大王殿祭り」は、秋のホゼ祭り前に行われる祭りで、神王面を掲げた神人たちが、「ウオーウオー」と魔除けの叫び声を出しながら村境まで巡行し、ホゼ祭りの前に村里から厄災を消除をする祭りである。

八幡神社系の「大王神社」が南九州には多い。県内で現存大王神社は、姶良市寺師大王神社、鹿屋市輝北大王神社・伊佐市大口宮人大王神社、さつま町楠木神社（元は大王権現）などである。これらの神社は、旧首長である大王を祀っている。熊本県人吉市の荒田・横瀬・山田・深川・平川の大王神社は、鎌倉期の地頭で相良氏に滅ぼされた平田氏を祀る。宮崎県西米良村所中藪の大王神社は後醍醐天皇の子懐良親王を祀る。末社として大王神社が記録されているのは、『三国名勝図会』によれば、蒲生八幡神社・大穴持神社・湯之尾八幡神社・安良神社・白鳥神社などである。

揖宿神社の「浜下り」

揖宿神社の「浜下り」は、神社から湊の浜と宮ヶ浜までを一年交代で交互に巡行する。これは「猿田彦神幸祭」とも言われているが、神社に残る明治四十四年からの「例祭及濱殿へ出後還御祭典順序」記録には猿田彦でなく「王面」と記録されている。今では「浜下り・猿田彦神幸祭」と言われているが、元は「王面」が巡行する祭礼であった。面裏に「王面　天文十四年乙巳二月　願主田中但馬守橘氏　謹奉納新宮王」と墨書された「王面」がある。

昭和二十五年「浜下り」写真には竿先に掲げられた王面が写っている。竿先に掲げられた王面が、それ以降に偶人化し、さらに大型化したようである。『先導する神様は鼻高天狗の「猿田彦」であるとの話が出たので、昭和三十年頃に猿田彦面に変えた』（平成元年幸野清次宮司談）。昭和三十年には人が中に入り持ち上げて歩く猿田彦の様子が写っている。昭和三十二年はリヤカーに載せている。平成二十二年はさらに大型化した猿田彦の様子が写っている。これを見ると、神王面が偶人化し、さらに大型化していった過程が分かる。

揖宿神社のように、弥五郎どんも神王面が偶人化したのかもしれない。しかし、いつ偶人化したのか、どのような経緯を経て現在に至ったのかはよくわからない。古文献には大人弥五郎と記述されているので、始めから大型化した偶人像であったのかもしれない。この揖宿神社の変遷過程が、そのまま弥五郎どんに当てはまるかどうかはまだ判断しかねる。

揖宿神社所蔵文書「慶応三年丁卯十二月取調　新宮末社祭式帳」の「新宮九社大明神　祭式之次第」には「王ノ役　王弟左右ニ備立時宣ニ応シ王ノ声在事、三日柴祭、月十日宮巡リ　隔年巡幸在　潮井役左右　御馬役左右　長刀振　刀振　杵玉振　鬼神舞五人　王弟役左右　辻々ニテ王ノ声在事」（註13）の記録がある。「柴祭り」や「宮巡り」とはあるが「浜下り」の記録はない。揖宿神社では、明治に入ってから「宮巡り・柴祭り」が、「浜下り」と呼ばれるようになったようだ。

揖宿神社「浜下り」昭和25年

揖宿神社「浜下り」昭和32年
（リヤカーに乗せている）

揖宿神社「浜下り」昭和30年
（人が中に入っている）

揖宿神社「猿田彦神幸祭」
平成22年

岩川八幡神社の弥五郎面

（一）　額の突起物

岩川弥五郎面と、山之口や飫肥の弥五郎面との違いは、岩川の弥五郎には突起物がある事である。岩川八幡神社の弥五郎面額部の突起物先端は、玉ねぎ状の形をしており、宝珠のようである。宝珠は仏教と深くかかわりを持つ。密教系の仏像では、神性（仏性）を示すために、眉間や額に三番目の目をつけたり、頭上に獅子冠を載せたり、宝珠を載せたりする。

古い神王面には額に突起物を持つ面が多い。このことは神王面が仏教的側面を持つ面であることを示している。その視点で見ると、岩川八幡神社の弥五郎面の方が飫肥や山之口の弥五郎面よりも古い神王面の容貌をしている面だと言えよう。

額の突起物を持つ面事例を挙げると、宮崎市生目神社・曽於市投谷八幡宮・同市澤田神社・大崎町都万神社・志布志市若宮神社・南九州市飯倉神社・肝付町岸良平田神社などの神王面がそうである。

神王面は、鎌倉期あたりからその姿が見えてくる。年代が分かってい

生目神社神王面
（国重要文化財）
（宮崎市教育委員会提供）

飯倉神社神王面

投谷八幡宮神王面
（一の王子）

霧島市「松下美術館蔵面」
（註 14）

る神王面では、宮崎市生目神社の寶治二年（一二四八）の神王面が突出して古い。その他の年代が古い神王面は、霧島市横川安良神社の貞和五年（一三四九）、都城市稲荷神社の永和五年（一三七九）と永享九年（一四三七）、国富町井口氏蔵の嘉吉四年（一四四四）、曽於市財部町沢田神社の宝徳三年（一四五一）、霧島市国分止上神社の明応四年（一四九五）、姶良市蒲生八幡神社の明応六年（一四九七）、などの面である（註15）。

（二） 日露戦勝記念、明治三十八年作の弥五郎面

弥五郎どん祭りに巡行する面は、明治三十八年（一九〇五）、日露戦争勝利記念に京都で作らせたと伝えられているが、その詳しい経緯はこれまで判ってなかった。

京都作と伝えられる弥五郎面の額上部にある宝珠様の突起物や、眼・耳・大鼻などの形状を見ると、元の古面（神面）を模して作った事は判明できる。古面を京都まで運ぶ事はおそらく無かっただろうから、写真等を参考にして彫ったのだろう。

明治 38 年作弥五郎面

元の古面は口を閉じた吽形面で、歯列左右の下から上向きに二本の牙がある。京都作の弥五郎面は、口が大きく開いており、上下歯列の左右に四本の牙がある。眉も古面より太く描かれ、古面には無かった上向きの太い鼻毛も書き加えられている。弥五郎どんは隼人族首領であるとか武内宿祢などという武将伝承を取り入れて元の弥五郎面よりも勇猛な首領風の顔に変貌させている。

京都で弥五郎面を作って貰うのは、大金もかかる事だから一般人には無理なことで、そのような大金を払える有力者は誰だろうかと、かねがね疑問に思っていた。近年岩川八幡神社に寄贈されたという元八幡神社の古写真（大隅町月野の方が寄贈）からその謎が解けた。その写真を見ると、鳥居奥の社殿前に白の幟旗が立てられ、その幟旗には「祈征露軍凱旋　明治三十七年□月、中山嘉兵衛」と書かれている。この写真から、中山嘉兵衛が明治三十七年に日露戦争勝利を祈願し、その翌年に祈願成就記念として京都で弥五郎面を作らせた事が推測できる。岩川の大地主・豪商であった初代中山嘉兵衛は、明治三十八年に死去。同年に二代目嘉兵衛（当時二十七、八歳）が家督を相続した。明治三十七年の戦勝祈願幟旗・明治三十八年の弥五郎面製作の年は、初代・二代どちらとも受け取れる微

元八幡（岩川八幡神社所蔵）

妙な年である。

弥五郎面は戦勝凱旋記念事業として作成された。前年の戦勝祈願幟旗の件もあるので弥五郎面製作に中山家が深く関わってきたことは間違いない。現時点では、中山家が全額を出したのか、或いは岩川住民の先頭に立って資金集めをしたのかは不明である。しかし中山家なら全額出せた。

二代目の中山嘉兵衛は明治十年二月四日生れで、大正七年六月に多額納税者として貴族院議員も務めた郷土の著名人である。中山氏のような人物でないとこのような事は出来なかった。中山嘉兵衛（二代目）は『大隅町誌・五八四頁』（註16）に写真入りで紹介されている。

中山嘉兵衛（二代目）

今では、この明治三十八年作弥五郎面が弥五郎の顔として定着している。その顔には、隼人族首領の末裔たる地域住民の誇りと思いが込められている。この面は、神面として古面と一緒に神殿に収められており、弥五郎どん祭りにだけ神幸する。裏に「平成二年九月　塗替上原孝二」と書かれているので一度塗り直されたようだ。

（三）川上久雄氏と弥五郎面

①弥五郎面製作

古面を修復したり、展示用弥五郎面を製作したのは、岩川在住の川上久雄氏である。川上氏は大正十二年鹿児島市下荒田生、昭和二十六年から昭和三十八年三月まで岩川高校併設の職業訓練校（木工）の講師を務め、退職後は岩川八幡神社鳥居前で泉木工所を経営していた。平成二十七年七月没。川上氏は弥五郎どんの面を四回製作している。

（一回目） 昭和四十四年、大阪万国博覧会から一式一体製作を依頼されて納入。この時は古面を見ながら製作し、古面よりやや大振りの面を製作した（縦九十㌢）。材は南洋材（ラワン材）丸太。この面は現在所在不明、万博終了後に民間会社が持って行ったらしい（川上氏談）。弥五郎面一式一体を作り大阪に運んだが、展示されたのは面と下駄だけであった。

弥五郎面の製作風景（川上久雄氏）

（二回目） 昭和五十二年、大阪国立民族学博物館から一式一体の製作を依頼されて納入した。この面も古面に似せて作った。材は楠材丸太彫り。製作時のベニヤ版雌型は現存する。今も同民族学博物館に展示されている。古面より縦横十㌢ほど大ぶりに製作した（縦九十㌢）。

昭和44年作弥五郎面
（大阪万博博覧会展示用）

昭和52年作弥五郎面
（大阪民族学博物館展示用）

（三回目） 昭和六十一年、各地から弥五郎どん出張展示の要請が多くなってきたので、町からの要請で展示用弥五郎面を製作した。この面は大隅郷土館に納入したが、現在は曽於市商工会大隅支所に保管されている。明治三十八年京都作の弥五郎面に似せて作った。面裏に八州作と彫りがあるが、これは牧園出身で鹿児島市山中刻泉堂の山中八州氏に材料を渡して彫ってもらい、塗装は川上氏が行ったという事情による。

（四回目） 平成八年、弥五郎の里「弥五郎まつり館」に一式一体を製作し納入した。これは現在同館に展示されている。三回目と四回目の面は大根占の材木店から購入した楠丸太から作った。四回目の面は残っていた木材が少し短かったので、三回目の面より縦が少し短い。縦七十六・五チセン、横三十五・五チセン。

昭和 61 年作弥五郎面

平成８年作弥五郎面
（弥五郎伝説の里展示用）

② 古面修復

川上氏は昭和五十二年八月に古面を修復して神社に納めた。この面は、神面として神殿に収められている。面裏にその修復経緯が書いてある。「弥五郎どん神面修復記録、昭和五十二年八月十五日。面材楠材　耳材杉材。氏子説に依るには、元八幡より当上馬場へ神社移転の頃（大正三～四年）大津十七氏が児童東条久、最勝寺俊信等を助手として神面修復さる。然し昭和四十四年五月大阪万国博に民族資料として摸刻一体一式を出品（泉木工川上久雄）。再に昭和五十二年三月大阪国立民族学博物館に一式一体を作納入す。この頃神面の胡粉辨柄（べんがら）離剥（ママ）盡しく原型不明の懸念に及ぶ。依って昭和五十二年八月川上久雄修復。全面カシューウルシ仕上げとす。鼻頭耳接合部欠損部はポリエステルパテ充填」。

川上氏は、『万国博と大阪国立博物館用の面を作る時は神社から神面を木工所に移し、それを見ながら製作した。神面は御幣付きの注連縄を張った所に置き、それを見ながら製作した。表面の胡粉剥落がひどかった。胡粉を次々と剥がしたら、墨で髭などを書いた跡が出てきた。左頬部は破損している所もあった。少し削ると楠木の香りがまだ微かに漂った。彫りは熟練した技量のある人の作ではない素人の作と判断した。六十年前の大正三年に大津十七氏が修復したらしい。その時に当時小学三年生であった東条久と同級生の最勝寺俊信がトクサで面磨き作業を手伝わされた、と東条久氏から聞いた。』（川上氏談　平成二十二年、出村聞取り）。

面を修復した大津十七は、戊辰戦争時に岩川私領五番隊の隊長を務め、庄内地方の関川（山形県鶴岡市）での戦いで手柄を上げ、岩川郷の創設に大きく関わった人物である。後に常備隊の隊長や岩川郷（五拾町村・中之内村）の兼任戸長を務めている。また、笠祇神社（中之内折田）の御神体を新たに作り直したこともあり、『大隅町誌』には「大津は

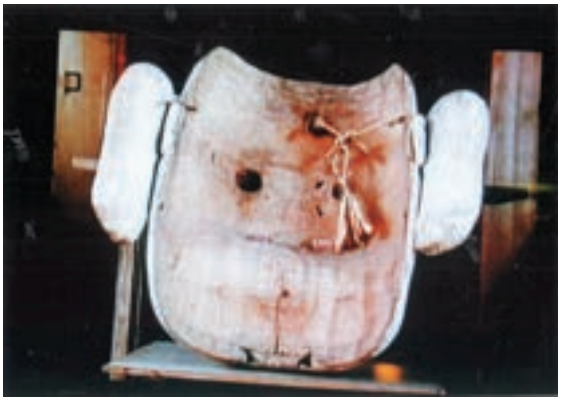
大津十七（戊辰戦争の頃）

自宅の庭にあった周囲一尺五寸ばかりの桐樹を伐り、一切の火の物を断ち、家人を遠ざけて、昼夜精進一週間かかって、高さ凡そ一尺の神馬に、高さ五寸の保食神が乗った神像を作りあげた」（註17）とある。元八幡時代の岩川八幡神社の改修にも携わっており、蟇股には、大津たちの名前が記されている。

古面（正面）

古面（側面）

改修された古面（正面）



古面（裏面）

改修された古面（裏）

「註」

1 出村卓三『王面の考察』一九九一年鹿児島県歴史資料センター黎明館「調査研究報告書第五集」五五頁）

2 『南九州の仮面』一九九二年鹿児島県歴史資料センター黎明館展示図録

3 向山勝貞『巡行する仮面』一九七六年隼人文化研究会「隼人文化2」所収

4 『三国名勝図会』一九八二年青潮社（第一巻一八二頁）

5 『三国名勝図会』一九八二年青潮社（第二巻二六〇頁）

6 『新田神社文書　関東下知状案　神王面事』一九六三年「鹿児島県史刊行委員会「鹿児島県史料Ⅲ」

7 『三国名勝図会』一九八二年青潮社（第三巻二九四頁）

8 『神書』止上神社蔵（寛延二年（一七四九）、止上神社別當乗林寺住職深亮房法印覺遍述、山内七右衛門筆記）

9 『岩川八幡神社の弥五郎どん祭り調査報告書』二〇一一年曽於市教育委員会刊に祭礼の様子は詳細記述。

10 『新田神社文書「新田宮神人名帳」』一九六三年「鹿児島県史刊行委員会「鹿児島県史料Ⅲ」

11 『鎌倉遺文』一九九五年東京堂出版　01188 86号

12 『薩隅日地理纂考』一九七一年鹿児島県地方史学会（一三五頁）

13 所崎　平『揖宿神社史料』二〇〇八年私家版）

14 『松下美術館コレクション（四）』一九九七年松下美術館（六十頁）

15 『南九州の仮面』一九九二年鹿児島県歴史資料センター黎明館展示図録

16 『大隅町誌（初版）』一九六九年大隅町（五八四頁）

17 『大隅町誌（初版）』一九六九年大隅町（一二九頁）

第四節　諸道具

一　頭上の鳥

鳥の形をしたものに尾羽も取り付けてある。

この鳥の種類については、「キジ」「鳳凰」など諸説あり一定していないが、地元の人々は「ヤマドリ・ヤマバト」と呼んでいる。また、昔から弥五郎どん祭りに関わってきた東馬場の野口久夫氏（八十六歳）によると、羽の文様から、あれは「ヤマドリ」であると言う。

「鳥」の頸部には「昭和五七・十一」「泉木工」と彫り込んであるので、昭和五十七年に作ったものである。寸法は全長六十三・四センチ。厚さ三・七センチ。昭和八年の写真にも「鳥」が写っているので、この「鳥」は以前から頭上に取り付けられていたことがわかる。

ただ、『麗藩名勝考』には、「頭面に冠を着せ」とあり、江戸期も頭上に鳥があったのか判然としない。

鳥の尻尾は弥五郎どんの頭上に取り付けた鳥の後方に取り付ける。尻尾の寸法は全長二一二センチで尻尾の一枚の幅は九センチのものを七本束ねてある。

また、昭和五十七年以前の羽部分が倉庫に保管されている。これには、「昭和四十三年十一月五日　有川貞弘68才　明治百年」とある。当時、東馬場に居住していた同氏は、弥五郎どん祭りに一生懸命な人だったらしく、その信仰心の篤さから特例として、宮仕の一人として迎え入れられている。

頭上の鳥の部分

頭上の鳥と尾羽

二　鉾

長さ三・一八メートル位で足元から顔の前までの長さで、現在の物は鉄で作られており頑丈で台車に固定出来るようになっている。これ以前は何で作られていたか不明である。

『大隅町誌（初版）』（昭和四十四年刊行）に次のようにある。

「岩川八幡神社の例祭は十一月五日で呼物の弥五郎どんはこの日に出勤される。弥五郎どんは神幸の先駆露払いすなわち先導者を現したもので身長一丈六尺で神体は竹篭製である。四輪車上に立ち、梅染赤土色の単衣袴（十六反）を着用し、鉢巻や帯胴巻等約廿反の木綿を装い、長さ一丈四尺の大刀、九尺四寸の小刀を帯び、大きな巾着をつけ、一丈八尺の鉾をついて風貌傲岸、幼児等一見戦りつするような姿態である」とあるように現在の物より長かったことがわかる。

なお、「笏」との説もあり、こちらは弥五郎どんを武内宿禰と見立てての解釈と考えられる。なお、『麗藩名勝考』には「矛」と記されている。

台車に固定されている鉾

三　刀

大小二本あり、左腰に挿す。現在の小刀は全長二八七・四センチ、大刀の全長は四二六・四センチで、両方とも裏面に「奉納　泉木工　昭和五七・十一・三」と記載されている。『神社誌』では大刀が九尺五寸（二・八八メートル）、小刀は七尺五寸（約二・二七メートル）とある。『神社誌下巻』に「弥五郎帯九尺五寸脇差七尺五寸」とある。

昭和二十一～二十五年は鉄砲等所持禁止令により、弥五郎どんの刀は県庁に没収され丸腰となる。これは昭和二十五年のサンフランシスコ平和条約調印まで続く。

大刀と小刀

四　巾着

巾着は出かけるときに必要なものを入れる布製の手提げ袋である。現在は見当たらないが、『三国名勝図会』などの記録には「巾着」とある。また、『鹿児島県史料麑藩名勝考』に「此祭に十月五日濱下の時、・・・大なる荷包（キンチャク）を提げ・・・」とある。

『大隅町誌』（昭和四十四年刊行）には「大きな巾着をつけ」と出てくるので、少なくともこの頃まではあったということである。

このような文献から、いつまでかはわからないが、弥五郎どん祭りには弥五郎どんが下げていたのであろう。

五　煙草入れ

県内では「トンコツ」と一般的に称している煙草入れのことである。古くはしばしば個人が手造りして「弥五郎どんの腰に提げてほしい」と寄贈していたもののようであるが、ここしばらくは曾於郡中央木炭組合が寄贈した煙草入れを腰に下げている。「昭和十八年」と寄進者の氏名が書かれている。

この煙草入れには、表面に「国立　霧島　参拝　登山　温泉　記念」と細い文字で彫ってある。寸法は煙草を入れるところは直径二十三・五センチ、高さ十二・二センチ。煙管は長さ六十五センチ、径四・一×二・九センチで寄贈者の「囎唹郡中央木炭組合」の名前がある。

煙草入れ

六　印籠

奉納という文字の上に島津家の家紋（丸に十の字）の印が入っている。この印籠には「岩川　峯野正秀」「月野永野詮」という文字と「贈　昭和二十二年　十一月五日」という文字が書いてある。

元来は印の容器であるが、薬を入れ腰に下げる小箱のことで、薬籠とも称される。印判を入れたところからこの名があり、室町のころから薬を入れるようになった。主として武士の礼装の装飾品・薬籠・印籠巾着。印籠巾着とは印籠のことである。

腰に提げる長円筒形の小箱で箱には細工がされ、緒には緒締め・根付がある。

印籠

七　草履

草履は地元の人々によって作られ奉納される。

草履は中に直径約三・五～四㌢、長さ一～一・四㍍のカラタケ四本、幅三～四㌢の孟宗竹、幅約一㌢のカラタケを組み合わせ、おおよその形作りをし、その上から稲わらを巻き付けながら造っていく。左右両方を二組に分けて造る。草履の鼻緒はワラで注連縄を作るときと同様に左縄で綯っていく。その上を赤・青・白の布で巻く。

中心になるカラタケと草履の前後の丸みを出すために割竹を針金でしっかりと固定しなければ、形の良い丸みを帯びた草履は造れない

寸法は幅七四㌢、長さ一六二㌢、厚さ一〇㌢。

わら草履作り（骨格部）

鼻緒作り

わら草履作り（わら編み）

完成したわら草履

わら草履作り：令和２年10月18日・28日

八　下駄

この下駄は泉木工から昭和五十六年に寄贈されたもので、「昭和五二年三月　国立民族学博物館　弥五郎どん一式納入記念　贈昭和五六年十一月　泉木工」の銘がある。寸法は幅四七㌢、長さ一〇〇・五㌢、高さ二六㌢。

この他、倉庫には三足の下駄があり、この中の古い下駄は昭和二十一年のものがある。

草履・下駄とも弥五郎どんに履かせるものではなく、弥五郎どんが御神幸に出るまでと帰って来てから祭りの最後の日まで、弥五郎どんの前に奉納する（立てかける）。

奉納下駄

三足の古い下駄

九　注連縄

注連縄を作るための藁の準備が大切である。しめ縄用の藁はモチワラでないと折れてしまうのでモチワラを使って作る。この藁の良し悪しで注連縄作りや出来上がりに大きな影響が出てくる。

持ち寄られた藁は昔は割竹で作られた「ワラスグリ」という道具があったが、古くなったため近年は「マンガ（馬鍬）」の歯を利用して作ったワラスグリが使用されている。

割竹製のワラスグリは割竹の先端を写真のようにU字型に切り、ビニールテープ（紐）などで結び固定したものを使っていた。寸法は幅四八㌢、高さ六八㌢。マンガを利用したものは木の台を作り、これにマンガの刃の部分を固定して造ってある。形は一見すると千歯こぎ（センバコギ）のようである。

昔のワラスグリ

・作り方

ワラスグリで不要な藁を取り除いた後、更に手で余分な藁を取り除く。

根元を揃えて、更に外に出ている余分な藁を取り除き、一握り位の大きさにワラでまとめる。

手できれいにすぐった藁をまとめやすくするために、昔はワラウッゴロという木製槌で藁を叩いて柔らかくしていたが、今は「カッター」という機械のローラーに一束ずつ通すと藁が柔らかくなる。カッターに通して柔らかくなった藁は水に浸ける。水に浸けることで柔らかさが保たれ綯（な）いやすくなる。

このようにした藁を写真のような道具を使い、しめ縄を作りやすいように準備する。

マンガを利用した
ワラスグリ

余分な藁を手で取り除く

カッター

藁一〇本くらいずつを道具に左右に交差させながら七段ずつに仕分ける。この仕分け方は作る注連縄の大きさによって段数は変わる。この部分は注連縄の中心になる。交差させるときは根元を少しずつずらすことで、次々に藁を継ぎ足すときれいに藁を継ぎ足せる。

中心になる部分を作った後、二～三人がかりでそれぞれの長さのしめ縄を綯っていく。藁を渡す人、綯う人、中心部分を押さえている人など様々な作業をする人がいる。途中、藁が乾燥したら藁を水に浸ける。また、湿気を持った藁が足りなくなったら補充する人など多くの人々の手によって注連縄は作られる。

注連縄作り風景

しめ縄作りの藁編み道具で、
藁を仕分けする

藁を継ぎ足しながら
長さを調整

わら編みの道具

藁を編む道具を使う

注連縄作り：令和２年10月18日

このようにして作られた注連縄は神（本）殿（長さ三・八メートル、中心部分の周り三〇センチ）、拝殿（長さ二・八メートル、中心部分の直径二十八センチ）、鳥居、賽銭箱用（長さ一・八メートル）、門神用二本（長さ一九二センチ、中心部分の直径一〇センチ）慰霊碑用（長さ二メートル）などに奉納される

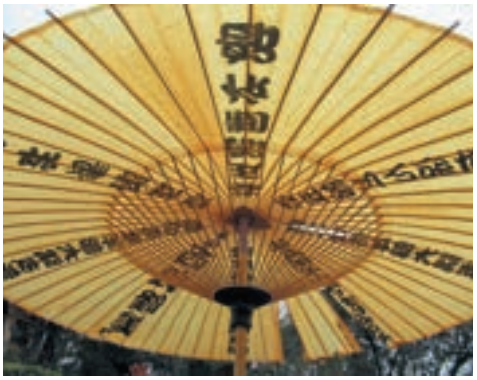
完成した注連縄

十　大傘

弥五郎どん祭りの際に使用。弥五郎どん本体の側に置かれ、浜下り巡行時には、弥五郎青年部が持ち歩く。

現在の大傘は、平成二十九年に新調されたもので小間には、「弥五郎どん保存会」「弥五郎制作部」「弥五郎青年部」「農協青壮年部大隅支部」「奉納西段隆美」「曽於市商工会大隅支部」「弥五郎どん祭り実行委員会」「商工会青年部大隅支部」とある。また、中棒部分に「大分県中津市　和傘工房朱夏」とある。

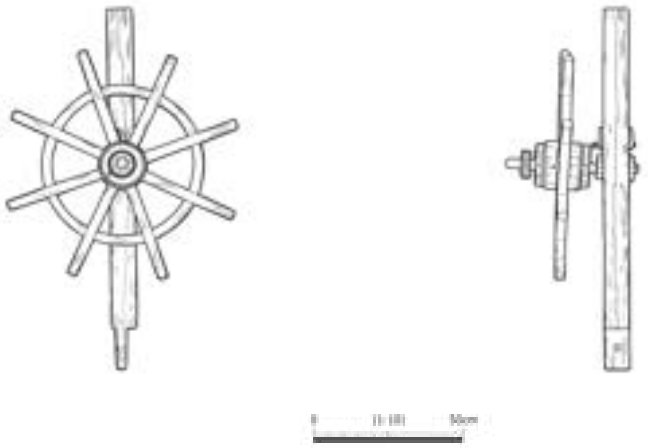
大傘（平成 28 年）



現在の大傘

十一　歯車装置

現在は使用されていないが、昔、弥五郎どんを起こす際か、浜下り巡行中に電線を避けるために本体を少し後ろに倒す必要があり、その際に使用されたものではないかと思われる装置が神社に保管されている。実際、どのように使用したのはか判然としないが、ここに付記しておく。



歯車装置測量図